

高齢者との世代間交流が幼児の社会-情緒的発達に及ぼす影響

矢郷哲志¹、湯本淑江¹、岡光基子²、望月太敦³、緒方泰子¹
(¹ 東京科学大学、² 宇部フロンティア大学、³ 杉並区立重症心身障害児通所施設わかば)

<要 旨>

少子高齢化、都市化の進行、ならびに核家族化の影響により、家庭および地域社会において自然に行われてきた子どもと高齢者の世代間交流の機会が著しく減少している。こうした背景のもと、世代間交流の重要性が指摘されているものの、その交流が子どもの発達に及ぼす影響については、科学的知見が未だ十分に蓄積されていない。そこで本研究は、幼児期における高齢者との日常的な世代間交流が、幼児の社会性、情緒、言語、運動（粗大運動・微細運動）など、子どもの多面的な発達とどのように関連するかを明らかにすることを目的とした。

本研究では、幼稚園・保育園・認定こども園に通園する4歳～6歳の幼児（年中・年長）の保護者508名に質問紙を配布し、213名から回答を得た（回収率：40.94%）。最終的に、欠損データを除いた209名を分析の対象とした（有効回答率：98.12%）。調査項目は、子どもおよび保護者の属性、高齢者（祖父母およびその他の高齢者）との交流の頻度と内容、子どもの社会性・情緒・行動特性（Strength and Difficulties Questionnaire）、ならびに全般的な発達（Kinder Infant Development Scale）であった。

分析の結果、幼児期における高齢者との日常的な交流は、子どもの社会性などの発達側面と有意に関連する可能性が示唆され、今後の世代間交流のさらなる推進の意義が示唆された。

<キーワード> 世代間交流、幼児の発達、高齢者、幼老複合施設、地域共生社会

【はじめに】

少子高齢化、人口の都市集中、核家族化の進展^{1,2)}は、これまで家庭や地域で自然に行われてきた子どもと高齢者との世代を超えた交流の機会を減少させ、世代間のギャップが生じている。その結果、子どもたちは、日常生活の中で高齢者と接触する機会を十分に持てずに、同質的な集団の中で小児期を過ごすことが多くなっている。子どもが社会に適応し、健全な成長発達を遂げるためには、異なる年齢や価値観を持つ他者とのかかわりを通じて、多様な人間関係や社会的経験を積むことが極めて重要である。

世代間交流とは、「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に伝えること」³⁾である。子ども世代が高齢者のもつ知恵や地域文化を受け継ぎ大人世代から学ぶ一方で、子ども世代からは新たな価値観や刺激を大人世代に伝えること、こうした相互の教え合い、学び合いが世代間交流の意義である⁴⁾。

高齢者との世代間交流が子どもに及ぼす効果についてはこれまで主に、高齢者および加齢（aging）に対する認識、態度、行動といった側面を主要アウトカムとして検討する研究が中心で

あった^{5,6)}。Bales ら⁷⁾は小学生を対象に、歴史やキャリア教育の授業を通じた高齢者との世代間交流プログラムを実施し、その結果、介入後の子どもたちは、高齢者を表現する際に肯定的な語彙をより多く用いるようになり、否定的な語彙の使用が減少したことを報告している。さらに、このような高齢者に対する肯定的な認識、態度は、介入後も 5～9 年間持続したとされ、世代間交流の長期的な効果が示唆されている⁸⁾。一方で、高齢者との世代間交流が、子どもの成長発達に及ぼす効果について検討した研究は極めて限られている。子どもと高齢者との世代間交流に関する介入研究を対象とした包括的な文献レビューにおいても、子どもの発達への介入効果を具体的に報告している研究は、全 27 件中わずか 1 件にとどまっており、知見が不足している⁵⁾。

子どもは親やきょうだい、家族、同年齢の仲間といった多様な対人関係を通じて、社会や文化に適応するために必要な社会性を発達させていく。特に幼児期は、自我の萌芽とともに、自己の情緒を理解、表出、調整する能力が向上し、他者理解や共感性が培われる重要な時期である⁹⁾。この時期に高齢者と親密に交流する機会を持ち、自己の存在が受容される経験を通じて、自己認知が促されることは¹⁰⁾、幼児の社会性、情緒、言語など、心身の発達に寄与することが期待される。このような世代間交流の効果を明らかにすることは、地域共生社会の実現を目指す上で、世代間交流の意義と必要性を裏付ける実証的根拠となりうる点で、学術的、社会的意義がある。

そこで本研究では、未就学の 4 歳から 6 歳までの幼児と高齢者との日常的な世代間交流が、幼児の社会性、情緒、言語、運動発達に及ぼす影響について質問紙調査を用いて横断的に探索し、幼児

と高齢者との世代間交流の効果と今後の世代間交流のあり方について検討することを目的とした。

【方法】

1. 調査施設および対象者

本研究は、首都圏に所在する幼稚園・保育園・こども園に通園する未就学児（年中・年長に該当する 4 歳～6 歳児）の保護者を対象とした。対象園には保育園や幼稚園などの小児施設と、特別養護老人ホームなどの高齢者施設が同一建物または同一敷地内で運営されている幼老複合施設を含めた。

2. データ収集方法

首都圏に所在する 17 園の幼稚園・保育園・こども園に研究協力を依頼し、そのうち 7 園から協力の承諾を得た。承諾を得た 7 園のうち 5 園が幼老複合施設に該当した。幼老複合施設に該当しない 2 園については、本研究において幼老複合施設と区別するため、単独型施設と定義した。対象園に在籍する園児の保護者 508 名（単独型施設 305 名、幼老複合施設 203 名）に対して、各園を通じて質問紙を配布し、回答後は、郵送または園内での留置回収により回収を行った。

3. 調査内容

1) 対象者の属性

子どもおよび保護者に関する属性として、子どもの年齢・性別、同居家族の人数、きょうだいの有無、父母の年齢および最終学歴、世帯年収、祖父母との同居の有無を尋ねた。

2) 対象施設における世代間交流の実態

対象施設において、園児と高齢者が実際に行っている世代間交流の内容について、自由記述形式で尋ねた。

3) 高齢者との交流頻度および内容

祖父母および祖父母以外の高齢者との交流頻度については、「ほぼ毎日」「週に数回」「月に数回」「年に数回」「年に 1～2 回」「触れ合う機会がない」の 6 件法で尋ねた。交流内容は、過去 1 年間に祖父母または祖父母以外の高齢者との具体的な活動経験について、以下の 9 項目について「あり」「なし」で回答を求めた：①日常的交流（会話、食事など）、②遊び（ゲーム、パズルなど）、③運動（スポーツ、ダンスなど）、④創作（手芸、折り紙など）、⑤芸術（音楽、絵画、書道など）、⑥散歩、⑦季節の行事（七夕、誕生日、クリスマス会など）、⑧絵本の読み聞かせ、⑨料理。

4) 子どもの発達

子どもの社会性、情緒、行動上の特性の評価には、「子どもの強さと困難さアンケート（Strength and Difficulties Questionnaire：SDQ）」を用いた。SDQ は、情緒の問題、行為の問題、多動／不注意、仲間関係の問題、向社会的な行動の 5 つの下位尺度から構成される 25 項目の保護者評定による自記式質問紙である。向社会的行動を除く 4 下位尺度は、得点が高いほど問題の程度が大きいことを示している。また、子どもの全般的な発達は、「KIDS 乳幼児発達スケール（Kinder Infant Development Scale：KIDS）」を用いて測定した。KIDS は、保護者による質問紙形式の発達評価表であり、「運動」「操作」「理解言語」「表出言語」「概念」「対子ども社会性」「対成人社会性」「しつけ」の 8 領域からなり、領域ごとに発達指数（Developmental Quotient: DQ）を算出可能である。本研究では、3 歳～6 歳 11 か月児を対象とした TYPE C 版を用いた。

4. 分析方法

各変数の記述統計量を算出した上で、Shapiro-

Wilk 検定を用いて SDQ および KIDS 得点の正規性を確認した。SDQ 得点は、全下位尺度において正規性が認められなかったため、分析にはノンパラメトリック検定を用い、KIDS スケールから算出された各発達指数（DQ）は正規性を満たしたため、これを従属変数とする分析にはパラメトリック検定を適用した。高齢者との交流頻度および交流内容と SDQ および DQ との関連については、分布に応じて Pearson の積率相関係数または Spearman の順位相関係数を用いて検討した。園の種別（単独型施設／幼老複合施設）による SDQ および DQ の群間比較には、Mann-Whitney の U 検定または t 検定により実施した。属性の群間差の検定にはカイ二乗検定を適用した。統計解析には SPSS Statistics version 30（IBM Corp.）を用い、有意水準は 5%に設定した。また、対象施設における世代間交流の具体的内容については、自由記述による回答をもとに、「日常の中での自然な交流」、「園児が高齢者施設を訪問する交流」、「高齢者が園を訪問する交流」、「園・高齢者施設以外の場所での交流」の 4 つに分類し整理した。

5. 倫理的配慮

対象者に対して書面を通じて研究目的、意義、調査方法ならびにプライバシー保護に関する事項について説明した。調査票は無記名式とし、回答用紙内の同意確認欄のチェックを付すことで同意が得られたものとみなした。本研究は、東京歯科大学（現 東京科学大学）医学部倫理審査委員会の承認を受けて実施された（M2023-190）。

【結果】

1. 研究対象者

研究協力園に在園する子どもの保護者 508 名を対象に質問紙を配布し、213 名より回答を得た（回

表 1. 対象者の属性

	全体 <i>n</i> = 209		単独型施設 <i>n</i> = 144		幼老複合施設 <i>n</i> = 65	
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
子どもの年齢						
4 歳児（年中）クラス	110	52.63	78	54.17	32	49.23
5 歳児（年長）クラス	99	47.37	66	45.83	33	50.77
子どもの性別						
男児	117	55.98	86	59.72	31	47.69
女児	91	43.54	58	40.28	33	50.77
きょうだいの有無						
あり	164	78.47	111	77.08	53	81.54
なし	45	21.53	33	22.92	12	18.46
祖父母との居住形態						
同居	14	6.70	7	4.86	7	10.77
近居	135	64.59	88	61.11	47	72.31
遠居	59	28.23	49	34.03	10	15.38
父親の最終学歴						
大学卒業未満	79	38.92	57	39.86	22	36.67
大学卒業以上	124	61.08	86	60.14	38	63.33
母親の最終学歴						
大学卒業未満	98	47.34	70	48.61	28	44.44
大学卒業以上	109	52.66	74	51.39	35	55.56
世帯年収						
800 万円未満	124	59.90	83	58.45	41	63.08
800 万円以上	83	40.10	59	41.55	24	36.92

Note. 子どもの性別（*n* = 1）、祖父母との居住形態（*n* = 1）、父親の最終学歴（*n* = 5）、母親の最終学歴（*n* = 2）、世帯年収（*n* = 2）には欠損値が含まれるため、構成比の合計は 100% とならない。

収率：41.93%）。そのうち、子どもの年齢情報が欠損している 4 名を除外し、209 名分のデータを分析対象とした（有効回答率：98.12%）。回答者は主に母親であった（*n* = 200, 95.69%）。子どもの月齢の平均値は 63.46 か月（SD = 7.26）、父親および母親の年齢の平均はそれぞれ 39.99 歳（SD = 5.71）、38.02 歳（SD = 4.95）であった。研究対象者の属性は表 1 に示す。単独型施設群と幼老複合型施設群の 2 群間において、属性に有意な差異は認められなかった。

2. 対象施設における世代間交流の実態

単独型施設および幼老複合施設における世代間交流の具体的な内容を表 2 および表 3 に示す。単独型施設においては、高齢者との「日常の中で

自然な交流」、「園児が高齢者施設を訪問する交流」に該当するものはなかった。

3. 高齢者との交流と SDQ、DQ 得点との関連

祖父母との交流頻度は「対成人社会性」領域の DQ 得点との間に有意な正の相関を示した（ $r = 0.15, p < .05$ ）。一方、祖父母との交流内容と SDQ 下位尺度との関連をみると、「日常的交流」（ $\rho = -0.14, p < .05$ ）および「遊び」（ $\rho = -0.16, p < .05$ ）は「仲間関係の問題」との間に有意な負の相関を示した。また、祖父母以外の高齢者との交流においては、「芸術」（ $\rho = 0.16, p < .05$ ）および「絵本の読み聞かせ」（ $\rho = 0.16, p < .05$ ）と「向社会的行動」との間に有意な正の相関を示した。祖父母との交流内容と KIDS の各領域 DQ 得点との関連をみる

表 2. 単独型施設における世代間交流の具体的内容

分類	活動内容
日常の中での自然な交流	・ 活動なし
園児が高齢者施設を訪問する交流	・ 活動なし
高齢者が園を訪問する交流	・ 夕涼み会、餅つきなどのイベントに高齢者が参加する ・ 園児の柿もぎを高齢者が手伝う
園・高齢者施設以外の場所での交流	・ 町内会、公民会主催の集まりに園児が参加する

表 3. 幼老複合施設における世代間交流の具体的内容

分類	活動内容
日常の中での自然な交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園児遊びの際、敷地内散歩中の養護老人ホームや特別養護老人ホームの入居者が声をかけてくれ、交流する ・ 園児が敷地内散歩中に入居者から声をかけてもらって交流する ・ デイサービスと園がガラス扉一枚で併設され、日常的に互いの様子を見守り合える ・ デイサービス前のテラスと園庭が隣接しており、園児の活動を高齢者が自然に見守ることができる ・ 乳児が散歩中にデイサービスのフロアに立ち寄り触れ合う（頭をなでてもらふ、タッチ、握手など）
園児が高齢者施設を訪問する交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別老後老人ホーム利用者との交流を目的に、毎月園児が高齢者施設を訪問する（交流内容は毎月変更する） ・ 園児がデイサービスを訪問し、利用者と一緒に折り紙などの活動を行う ・ 敬老の日やクリスマスに園児が高齢者施設を訪問し、歌や楽器演奏、ダンスなどを披露したり、プレゼントを渡して感謝の気持ちを伝えたりする ・ 毎月開催される高齢者の誕生日会に園児が参加し、一緒にお祝いをする ・ 卒園時に年長児が高齢者施設を訪問し、利用者からプレゼントをいただく
高齢者が園を訪問する交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ ハロウィン行事の際に、養護老人ホームの入居者が来園し、園児とともに行事を行う ・ 保育園が主催するお祭りに高齢者が参加し、交流する ・ 園で実施された「お店屋さんごっこ」に高齢者も出店者として参加し、一緒に活動する ・ 発表会や運動会において、園児が劇や遊戯を披露し、高齢者が観覧する
園・高齢者施設以外の場所での交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ 養護老人ホームの入居者、地域のシニアボランティア、デイサービス利用者などと一緒に畑作業、花の栽培活動を行う ・ 春に園児と高齢者がともにお花見を楽しむ、体操をする

表 4. 単独型施設および幼老複合施設の 2 群間における SDQ および DQ 得点の比較

		単独型施設			幼老複合施設			p
		n	Mean	SD	n	Mean	SD	
SDQ	情緒	143	1.97	1.90	64	2.45	2.12	.70
	行為	144	2.24	1.56	65	2.35	1.76	.74
	多動／不注意	142	3.63	2.07	65	3.46	2.18	.13
	仲間関係の問題	144	1.71	1.41	65	1.98	1.62	.43
	向社会的行動	144	6.53	2.15	65	6.77	2.29	.04*
	総合的困難さ	141	9.57	5.01	64	10.31	5.57	.71
KIDS DQ	運動	143	98.70	16.08	65	93.94	14.17	.24
	操作	143	107.36	12.41	65	111.70	12.64	.18
	理解言語	143	98.70	16.08	65	110.22	14.37	.21
	表出言語	143	107.35	12.41	64	105.06	18.95	.65
	概念	143	106.75	12.38	64	116.20	18.42	.22
	対子ども社会性	143	105.69	16.71	65	105.16	13.20	.07
	対成人社会性	143	112.34	15.52	65	114.05	18.44	.04*
	しつけ	143	100.53	11.98	65	104.39	19.29	.01*
	合計得点	143	106.74	20.51	64	107.40	11.58	.13

Note. p 値は SDQ については Mann-Whitney の U 検定、KIDS DQ については t 検定に基づく。

p* < .05. SDQ = Strength and Difficulties Questionnaire, KIDS = Kinder Infant Development Scale, DQ = Developmental Quotient. SD = Standard Deviation.

と、「運動」と「理解言語」($r=0.22, p<.01$)、「合計得点」($r=0.17, p<.05$)、「創作」と「理解言語」($r=0.22, p<.01$)、「表出言語」($r=0.14, p<.05$)、「対成人社会性」($r=0.14, p<.05$)、「しつけ」($r=0.16, p<.05$)、「合計得点」($r=0.19, p<.01$)、「散歩」と「概念」($r=0.17, p<.05$)、「季節の行事」と「理解言語」($r=0.15, p<.05$)、「料理」と「表出言語」($r=0.15, p<.05$)、「概念」($r=0.18, p<.05$)との間に有意な正の相関を示した。一方、祖父母以外の高齢者との交流内容と各領域 DQ 得点との関連では、「遊び」と「表出言語」($r=-0.19, p<.01$)および「しつけ」($r=-0.15, p<.05$)との間に、「絵本の読み聞かせ」と「対成人社会性」($r=0.20, p<.01$)との間に有意な相関が認められた。

4. 施設類型間における SDQ および DQ 得点の比較

単独型施設群および幼老複合施設群における SDQ 得点および DQ 得点に比較結果を表 3 に示す。SDQ の下位尺度である「向社会的行動」、な

らびに KIDS の「対成人社会性」領域および「しつけ」領域において、幼老複合施設群の得点は単独型施設群の得点と比較して有意に高かった ($p<.05$)。

【考察】

本研究では、4 歳～6 歳の未就学児における高齢者との交流と、子どもの社会性、情緒、行動およびその他の全般的な発達との関連を検討した。分析の結果から、高齢者との交流頻度および具体的な交流内容が、幼児の対人関係能力や言語的・認知的側面を含む発達と有意に関連していることが示唆された。

祖父母との交流頻度と「対成人社会性」DQ 得点との間に正の相関が認められたことは、幼児が日常的に異世代と関わることが、年長者に対する適切な関わり方や社会的スキルの獲得に関連している可能性を示唆するものである。同様に、祖父母との「日常的交流」や「遊び」と、SDQ 下位

尺度「仲間関係の問題」との間に負の相関が見られたことから、高齢者との交流が同年代の友人との関係形成にも波及する可能性が考えられる。先行研究においても、異世代との交流経験が子どもの共感性や思いやりの発達に肯定的な影響を及ぼす可能性が示されており¹¹⁻¹³⁾、本研究の結果と一貫している。また、高齢者との具体的な活動内容（創作、散歩、季節の行事、料理など）と、言語領域、概念、しつけ、社会性など多様な発達指標との間に有意な相関がみられたことは、交流の質的側面が子どもの発達に関連している可能性を示唆する。交流の多様性が子どもの刺激環境を豊かにし、発達の複数領域において促進的に機能している可能性がある。しかしながら、本研究の分析は横断的かつ相関的であり、因果関係を明らかにするものではない。今後は、交流の内容・頻度と発達領域との関連について、交絡因子を統制する多変量解析や、観察研究や縦断研究を用いて包括的に検討していくことが求められる。

施設類型別の比較においては、幼老複合施設に在園する子どもが、「向社会的行動」および「対成人社会性」「しつけ」の領域において有意に高い得点を示していた。これは、高齢者との交流機会が日常的に確保されている環境が、子どもの社会的発達や、社会的規範の理解・自己制御といった発達側面と関連している可能性を示唆するものである。幼老複合施設では、園児と高齢者が相互に施設を行き来しながら、自然な日常的接触に加え、運動や遊び、野菜・草花の栽培、季節の行事、創作活動など、内容的にも多様な世代間交流が展開されていた。こうした多様で継続的な交流の積み重ねが、子どもの発達にとっても有効な刺激となっている可能性がある。一方で、単独型施設においても地域の高齢者との交流活動が実施されて

いたものの、主に季節行事等に限定された短期的・一時的な交流であった。高齢者施設との物理的距離に起因する制約や、新型コロナウイルス感染拡大の影響がなお残存していることなどが、交流頻度や継続性の確保を困難にしている可能性がある。今後は、異なる施設形態における世代間交流の特性や有効性を比較しつつ、それぞれの利点を活かした交流の在り方について検討を深めることが求められる。さらに、交流の場を、園や高齢者施設の内部に限定せず、地域社会全体で子どもと高齢者が自然に関わることのできる環境の整備も重要である。地域ぐるみの継続的な世代間交流の仕組みを構築することで、子どもの多面的な発達を支える社会的資源の一つとして、世代間交流の機会がさらに拡充されていくことが期待される。

【本研究の限界と今後の課題】

本研究は対象となった施設数、サンプル数が限られており、得られた結果の一般化には限界がある。交流の頻度や内容と発達指標との関連をより厳密に検討するためには、今後、より大規模なサンプルおよび多様な施設を対象とした研究の実施が求められる。また、施設特性や家族背景など、個人差・施設差による交絡を統計的に制御した上での検証も必要である。さらに、世代間交流の質的側面や、その発達への影響の持続性を検討するには、縦断的研究デザインの導入が有効である。観察法やインタビューを組み合わせた混合研究法を用いることで、交流の質的側面や発達への寄与プロセスをより多面的に把握できると考えられる。今後は、こうした方法論を踏まえた実証研究を通じて、世代間交流が発達に及ぼす効果に関するエビデンスを蓄積していくことが求められる。

る。

【謝辞】

研究助成をいただいた明治安田こころの健康財団の関係者の皆様、本研究に協力いただいた幼稚園、保育園、こども園の関係者の皆様、保護者の皆様に心から感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 内閣府. (2027). 令和 7 年度版高齢社会白書. Retrieved from: <https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html> (2025 年 6 月 26 日閲覧)
- 2) こども家庭庁. (2024). こども白書. Retrieved from: <https://www.cfa.go.jp/resources/whitepaper/r06> (2025 年 6 月 26 日閲覧)
- 3) Newman, S. (1997). History and evolution of intergenerational programs. In S. Newman, S., Ward, R., Smith, T., Wilson, J. and McCrea, J. Intergenerational programs: past, present, and future. Washington DC: Taylor & Francis
- 4) 亀井智子 (編). (2017). 地域における世代間交流支援ベストプラクティスハンドブック. 聖路加国際大学大学院看護学研究科老年看護学.
- 5) Gualano, M. R. et al. (2018). The impact of intergenerational programs on children and older adults: a review. *International psychogeriatrics*, 30(4), 451–468.
- 6) Giraudeau, C., Bailly, N. (2019). Intergenerational programs: What can school-age children and older people expect from them? A systematic review. *Eur J Ageing* 16, 363–376.
- 7) Bales, S. S. et al. (2000). Children's perceptions of elders before and after a school-based intergenerational program, *Educational Gerontology*, 26(7), 677–689.
- 8) Thompson, E. H., Weaver, A. J. (2016). Making Connections: the legacy of an intergenerational program. *The Gerontologist*, 56(5), 909–918.
- 9) Santrock, J. D. (ed). (2019). Life-span development 17th edition, New York; McGraw-Hill education.
- 10) 關戸啓子. (2002). 複合型施設における高齢者とのふれあいが幼児にもたらす教育的意義. *日本家政学会誌*, 53(7), 649–657.
- 11) Femia, E, E et al. (2008). Intergenerational preschool experiences and the young child: Potential benefits to development. *Early Childhood Research Quarterly*, 23, 272–287.
- 12) Roserbrook, V. (2002). Intergenerational connections enhance the personal/social development of young children. *International Journal of Early Childhood*, 34(2), 30–41.
- 13) Di Martino, G. et al. (2024). Bridging generations through movement: "how and why" intergenerational programs operate-a systematic and narrative review. *Geriatrics*, 9(6), 139.